退廃の象徴詩　　――現代日本の詩人達へ――

Sai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
退廃の象徴詩　――現代日本の詩人達へ――

【Ｎコード】
Ｎ３６２７ＢＡ

【作者名】
Ｓａｉ

【あらすじ】
現代日本において、詩というものは、その本来の力を失っている。フランス象徴詩が日本に紹介されてから、我々は、そこにある詩の本質に、未だ気付いていないのではないか。では一体我々は、何を頼りに詩を書けばよいのか。象徴詩が持つ、本来的な力を、一連の詩群によって明らかにする。

退廃

言葉、その、剥ぎ取られた意味を、返し、再び、言葉に、宿らせる。全き、自然の内の、隠された言葉、ここでも、また、我々は対峙する。何度も、言葉、言葉の、その、内奥の、響きと。

りんごは、あの、退廃の前日まで、りんご、そう、りんごであった。赤い皮の、白い果汁の、酸味、甘味、それは、偉大な、知恵の味、悪の味、見出す、二元の、ハルモニア。
今、りんごは、りんごをやめた。意味の腐敗、そして、取り出す、わずかな蜜。では、蜜は、いかに使われるのか。全く、人は、蜜を舐めただけで、りんごに辿りつけない。全く、りんごは、もはや、りんごではない、のだから。勤勉なミツバチ、おお、自らの針に刺され、二重の死に陥る者、不協の和音で始まる、退廃の時。
さあ、詩人達、墓掘りを見習いたまえ。冬の雪の下、この白は、清浄な死の色、黒い棺は、汚れた生の色。スコップを突き立て、土をえぐる。なんだ、この根は？　あの見事なイチイの木、お前の、化け物じみた枯れ具合、立派な墓守として、邪魔をするのか。邪魔を？　とんでもない。この、骨ばった手を見よ。今しがた、ゲートを開けてきた、この、業績を、むしろ、お前（イチイの木よ！）、褒め称えてくれ。この墓地を、寂しい風景と言うのか。お前が慣れ親しんだ世界が、お前をだまそうとする。この手が持つものが見えるか。これは、かつて、りんごだった。だがここにはもう、それは、ない。りんご、ああ、かつての思い出、死者の行進のように、再び、戻ってくるとしても！
音楽をやろう。光をやろう。そして、形象をやろう。その内から、おお、偉大なるハルモニア。りんごは復活する。りんごを越えて、なお、りんごを提示する、この、始原のハルモニアのもとに。

足音、なんだろう、さく、さくと、雪を汚す音、黒服の者達、退廃のゲートをくぐり、悲嘆のため息で、死者を、冒涜する者、歩み寄れ、近くに、そして、顔を、その、しわがれた顔を、見せよ（見せよ、御身の姿）。いや、お前、不吉な黒服よ、去れ、そして、沈黙せよ。

退廃の、死の、それらの真実を、この墓地に、求めるな。抱(いだ)け、お抱(いだ)け、たわいないもの、繊細なもの、未熟なもの、それらの、影の、生の、言葉を。お前のざわめく血のなかで。

今は亡き、モルフェウス

光の、なかの、完成、光、音、目に見える、無限。朦朧の扉を開けて、降臨する夢と、その、神に仕えるのか。いや、もはや、人間は、それほど、弱くない。だがこの煙、魅了する、紫の神秘。この香り、耐えがたい衝動は、まだ、我らの地中深く、根を張っている。百年以上、養分を吸い取ってきたのだ。人の心（それがみかけ、衰退しているとしても）、イメージ、そして、退廃に続く、病から。

墓掘りが、なぜ、あんなにも、痩せていたのか。説明できるか。冬枯れの刻、食べ物はなく、見よ、テーブルの上、未完の料理、半焼けのポテトを。まるで土をしゃぶるように、固い芋をかじる。薄暗い木造の小屋、それが、彼の家。彼は、猛烈な刺激の煙から逃れてきた。

「異常な昂揚と、都会の黙殺、俺はまるで、生き長らえた、犬（ワンワン！）、あわれな冤罪者！」

白い手が、すっと伸びてくる、そんな夢に、彼は怯える。毎夜、毎夜、腕の付け根には、モルフェウス！

「お前は、俺が、殺したのだ！」

だが、こんなにも、純粋な、白い肌、もしかして、いや、そうだ、モルフェウス！　お前の曖昧な魂の境界は、まだ、人々、その、一人、一人の、純真な魂の部分を捕まえ、痺れさせている。

ああ、消えていくのか、煙のなかに。輪郭を失くし、溶け合い、個人に還り、もはや、流動せぬ、がらくた達の寄せ集め。意味達よ、言葉が持つべきもの、その所有のありかを巡って、まだ、答えを出せないのか。

おい、詩人達、言葉の故郷を思え。ただ思え。お前の所有となるべき言葉が、ただのひとつ、ひとつ、そう、ひとつでも、あるか？

ではお前は誰だ（名を名乗れ！）？

ヴェルギリウス、ホメロス、アイスキュロス、
違うのか。
ブレイク、イェーツ、エリオット、
いや、違う。
ノヴァーリス、ゲーテ、リルケ、
でもない。
マラルメ、ボードレール、ヴェルレーヌ、
近い！　お前の精神の川上に、ひっそりと顔を見せ、苦い表情で去っていく者達。退廃のゲートの先、だが、今は亡き、モルフェウス、その住処。
ああ、墓掘りよ、無知な、いや、無意識な必然、お前は、煙を避け、そして煙の主の墓を、生業に選んだのだ。その、痩せた細胞の、ひとつ、ひとつ、そこには、今、新たな免疫がある。心を狂わせ、崩壊の業で、言葉を飼いならす、そんな道徳に、抵抗する、ひとつの、滑らかさ、が、ある。
怖れることなく、手に取れ、鍵を。もうひとつのゲート、超越の、ゲート、その、鍵を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3627ba/

退廃の象徴詩　　――現代日本の詩人達へ――

2012年1月10日00時48分発行